

昭和四十七年二月二十七日(日) 史跡めぐり資料新方川崎地区

第四十五回史跡めぐり

清浄院新方
聖徳寺川崎

越谷市郷土研究会

第四五回 史跡めぐり案内

一、日時 昭和四十七年二月二十七日(日)

午前十時

一、集合所 北越谷駅東口 集合

一、場所 清浄院・聖徳寺

コース 北越谷く招杖へバス

招杖下車

新方一聖徳寺

清浄院

一、会費 二百円 交通費其他

但 昼食費は合ます

○ 昼食は各自御持参下さい。

備考 昭和四十一年訪問したことが

ある。

目次

見学資料

川崎聖徳寺宮縁起

佐野 稲葉雄寿氏談……………二頁

清浄院

栄広山由縁著願書……………五頁

中世……………四

近世……………

近代……………

新編武蔵風土記稿(第十卷から)……………四頁

越谷市の史蹟と伝説から……………四頁

大松清浄院

栄広山浄土寺 清浄院一山了史年表……………六頁

以上

川崎 聖徳寺略縁起

住持 福 葉 齋 寺 氏

聖徳太子奉齋の事、夢りたる世時、沿線行樂案内國の中央に、聖徳寺と記載しある該寺は「太子山聖徳寺」と号し、太子講堂群の聖域でもある。

慶長の頃、開山源前和尚、當時赤痢の武蔵野に聖徳太子の遺徳を弘く武東に宣揚すると共に、糖廬人を結集して太子講を結成し、晩年この地を選び阿弥陀堂に統いて太子堂、地藏堂を建立した。

註 明治維新の癸卯庚辰の際、太子堂は其の災を蒙り太子の本像は、現に阿弥陀堂に安置さる。

歴代又此の意を継承し念仏弘通の傍ら、太子華鬘、地藏菩薩の利衆を布教して今日に及んでいむこのことです。嘗って河内國藤原太子御廟所より我が国内に太子堂の旧跡は幾多あるけれども、太子山聖徳寺の号を持つものは該寺のみだということです。

太子山聖徳寺について今少し申上げますと、當寺の東約五〇米の所に古利根川の清流が南へゆるやかに流れ松伏橋村のところで大ましく東に張り出して流る。此の辺り川巾二〇〇米、広い眺望は格別、この張り出した流の隈に木立に囲まれた太子山聖徳寺がある。

最近越谷市に編入され、寺の所在地も越谷市川崎となつた。寺口淨土宗、古い記録もある。参詣人へ領つ小さい十七卷應法についている縁起を見ると徳川の初期慶長年間には阿彌陀堂といふ坊さんが大和國から太子像を奉じて此の地に來て附近の村々に太子様御をひかめ、太子講を結び、随筆この寺を建て、開山になつたとあります。

庫裡の前に三祀柱の大銀杏があり、時代を物語っております。今の茅葺の本堂も當時のものですが、大正の大震災の後修繕したものだと云われております。

現任太子堂はありませんが、太子像は本堂の阿弥陀如來のわきに厨子に納めてあります。本堂で高さ一尺二寸三寸、右腰の立像で両手で持つておられるものは破損しているが、どうも柄杓舟ではなさそうであります。おしいことに何時頃から甚だましい塗替えをやっている。本堂の左前方に太子堂があつたそうて、それを心げの良くない住居の時代に売つて吞んでしまったとのことであります。新屋にする目的で買った其の味は、運んで建てたその晩に火事にあつたとの事であります。それは明治になつてからださうです。

この太子様は近郷の信阿菩薩のて、毎年五月五日には土地の取入衆が集まつてお祭りをしてあります。話しによると東京方面にも聖徳講とか、聖徳齋などが

あつて毎年バスをば立てて参詣に参ります。何れも
取入衆が講の中心となつてゐるようであります。

先年は鹿山元首祖代理が当山に参堂なされ「聖徳」
の稱號が奉納され額には、首相直筆で「聖徳」の二
字を墨痕鮮かに揮毫され、新しく寄進されてありま
す。信者の同から愛蔵に形どつた太子堂を作らう
という話までも出てゐるさうです。

「楹地蔵尊」

境内の入口に引さし深き彫りの地蔵尊が 祭られて
あります。が頭ちこれが靈驗あらたかき楹地蔵尊と伝
えられております。

附記 伝説

川崎の楹地蔵尊の伝説

ひとく磨減した木柱一枚が、楹地蔵山縁起として
その由来を判綴つてゐるようです。これによると、
太子が存座を訴された折、遺骸から地蔵尊のダラニ
が理われた。

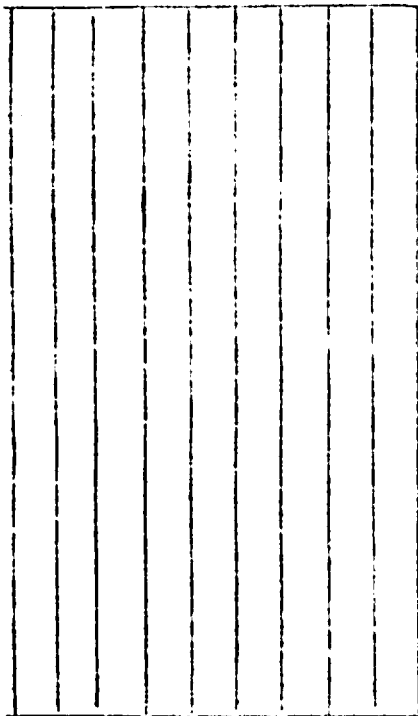
太子は存座が、実は地蔵尊の化身であつたことを
知られ、この地蔵尊を拜られてお祀りになつたと。
そして願を授けると願を遂げると言ひのす。
おのれども、此を言て、いはんじへう靈驗かめら

たのと伝えられております。それで近頃近社はもとよ
り、江戸神田からわざわざお願いた参られる方々もマ
いのであります。

これらの方々の「大願成就」の旗が奉納されてあり
ました。南北宮飾親大川戸村の村衆人が、安政二年の
十月吉日とあるも昔からの、なまけ深い地蔵であるが
がわかると思ひます。

楹地蔵の處について

この處の扉口岩窟のことであつて「楹地蔵」さほあり
ません。いつも入極處になると 石から楹水が湧て
地蔵尊全面から出て来るのを、阿母とはなした、この
水が出たのだとまいております。



清淨院

総合調査の手引より

中世 栄広山由緒著願書、保存板碑及び地形等

近世 寺檀関係・本末寺檀関係、寺諸関係、遷去帳

等諸書類及び屋所等（中興の副基といわれる

杉裏家の院政治士君望石がある）

杉浦家については「関東郡代伊奈忠善の政略

と家臣の動向」地方史研究九十九号に所収

近古 神仏分離令関係（本尊階上寺）関係諸帳等

新編武蔵風土記稿（第十巻から）

○ 大松村は、江戸より七里、辰戸十八、村の四隣、

南は大杉村、西北は船戸村、東は古利根川を隔て、

葛飾郡大川戸村なり。当村も古より御料所なりしを

宝暦年中、大岡出雲守に賜い、今主属正の領分なり

用水、檢地は前村に同じ

○ 古利根川 東北を流る、巾八十間

○ 香取社 村の鎮守に、向畑村 葦光殿の侍

末社 船荷社

○ 清淨院 浄土宗 芝増上寺末 栄広山浄土寺

と遷す。寺領十二石の御朱印は慶安元年九月十
七日賜ふ。本尊阿彌陀を安ず。立像にて長三尺
許、恵心の作といえり、開山堅真、宝暦元年七
月廿八日 示寂す、

当寺の兩少許を隔て南山塚と云あり、そこよ
り掘出せし古碑に嘉祿元年の文字見えたり。是
起立の人の碑ならんと言

○ 鐘楼 宝永七三鑄造の鐘を掛く

○ 香取社 船荷社 塔頭 宝地所（岡地地蔵を安

○ 相心寺 清淨院末 谷正山と号す。本尊阿彌陀

を安ず。開山 善悦、慶文元年十二月四日寂す

越谷市の史跡と伝説から

○ 大松 清淨院

浄土宗 栄広山清淨院 開基は僧賢真、本尊阿彌

陀如来は恵心僧祐の作と云う。当寺は今を去り、

五百有余年前の聖徳の昔創建、新方綱の起源を探

究するに唯一の遺跡なり、南山は此の地を定めて

聖人に徳弘弘通の傍ら当時の古利根川の氾濫と

此の地を安ずを慮り、清淨院土寺と稱する擬道と

築き、又歴代の僧、克く郷人のために大救福利に

意を用い慶安二年（三一二年前）但昭和 三
 には寺領十二石の朱印を賜いしと懸く。不幸に
 も明治の中興にさしもの大加藍村室番惣等全く
 灰燼に帰し、昔日の面影は全く全くなし。御す
 残念です。ただ境内の竹林中に現存する開山碑
 を掘出したる所、たまたま蘇我元等と彫みたる
 青古碑数点発見せり。

是れが運立の入ではないかと申されて居りま
 す。尚本寺境内に 藤原妻子の墓を（大坂城落
 城の落武者と聞く）祀る小堂がある。

大正の世紀の之を信ずる四隣の里人は、藤原
 靈神と崇拝し、参詣人が雲集いたし門前、市を
 なしたる時がありました。

栄広山由緒著聞書概略

承享十二年（一四四〇）將軍足利義教は関東公方、
 足利持氏を攻める。持氏自害後その遺児春王、安王
 は結城氏朝と共に挙兵するが破れる。その折結城軍
 の中に、野本大炊丞秀俊と云う者があり、その妻は
 一子松崎丸を伴い、乳母と共に妻の兄下総國笠節の
 大川戸左衛門の館に落ちのびる。笠節の母がのびて
 三人は海に投身し、三頭一尾の大地と化する。この時

浜辺へ入が奇りつかず抗死する。

文安四年春（一四四〇）

栄広山住取願上人は大地の願いを聞いて、翌夜と
 日の大念仏法要を行ったが、一山鳴動して一夜のう
 らに願が固に成った。これが世にとも開山塚とも呼
 ばれるものがある。

栄広山を六ヶ村の瀬登と云ふ

その説は、文亀年間（一五〇一）新方領主向畑城
 の新方次郎頼希と武州騎田郡八条領主八条兵衛尉と
 が争乱を起し、文龜四年正月、川林楓で討戦する。
 この時頼希は戦死、新方領は八条軍の手中に入って
 向畑城は別所三郎左衛門の居城になる。

なる、栄広山住取高賢上人は、新方頼希の弟であ
 ったことから若浮院も焼打ちされ、高賢上人は岩槻
 の波江城へ逃がれる。

永正十七年（一五二〇）向畑城奪回

高賢は新方譜代の武士や栄広山衆徒と共に兵を挙げ
 向畑城を奪回する。八条軍は大軍を別府に集める。
 先陣は吉柳外記左衛門、川原田隼人、柿ノ木小幡、
 二陣は大沼渡飛守、西番左近右衛門、領家八郎。

同分吉輝九郎・後陣は八条兵衛尉

一方 新方勢は

一山の衆兵・新方譜代の武士、それに波江の加勢と共に、永正十八年正月六日、別府を急襲、豆蔵根に而陣の八系勢大曾根上野介に背後をつかれて苦戦するが、大沢に来ていた安國・淨徳二山の衆兵が救援し新方軍は大勝する。

高賢は譜代の武士の旧縁を安堵し功ある者に賞を与えるなど東新方の地口自派栄広山の領地のようになり、人々は六ヶ村の和堂というようになる。

北条氏康 栄広山の

由緒を辨にたずねる。

天文年中(一五三二)北条氏康は武藏下総を平定するが栄広山の由緒を特に訪ねる。高賢これに答える氏康は諒承して六ヶ村領地の面判を与える。

天正十八年(一五九〇)吉栄広山の由緒を訪ねる。
(天正十八年秋九月)

一五九〇年秀吉奥州征伐の途次岩槻に宿り栄広山の由緒をたずねる。高賢上人の筆跡を陳べたが現住に到つてはすでに一所懸命の土地であるとは認められぬとして領地を贈上げたが、その由緒を成す為六ヶ村の内七十二石を領有すべしとされた。

根者 武州用土主藤田新花御門平侍吉天文廿二年北条氏邦に直し用土新花御門と唱える。

嘉永四年川上氏の写本に依る。

市史へんさん室 本面清利成

栄広山浄土寺清浄院一山歴史年表

(上の年次は昭和四〇年夏延算備考は昭和年表(一)は前との差)

天皇名	皇紀	年 前	記 事	備 考
(七〇八) 敏徳天皇	(一〇一九)	九〇〇	康平二年 新方親貞は、新方領を率い(千葉氏の余裔)源義家に従つて前九年の役に戦う。戦功多し。 当時の新方領は、旧新方村、板井村、大姥村、増村村 大川戸村 船伏村をふくむ。	昭和四〇年 一九六五年と 延算年表 表(以下同じ)
(九六六) 後醍醐天皇	(一九七八)	六三九	嘉徳三年 兩山親貞上人 栄広山浄土寺清浄院を建立する。 (同年新方領六ヶ村清浄院領とする)	四七年表 から 六四四年

<p>後小松 (九九代)</p>	<p>二〇四七 (一三八七)</p>	<p>五八〇</p>	<p>用 基 杉浦家とし、賢上人の身分に因しては不詳) 嘉慶元丁卯七月廿八日 新方領主清淨院開山賢上人志定 (のまき)</p>	<p>(大の三才) 五八五年丙</p>
<p>林 光 (一〇二代)</p>	<p>二〇五五 (一三九五)</p>	<p>五七〇</p>	<p>応永二年甲午春・密命詔新方領地頭職 向地城主新方玄滿允 頼基清淨院開山賢上人に拜依し、その意を慕い、清淨院佛 橋僧坊を造営完了すむ。</p>	<p>(十年後) 五七七年丙</p>
<p>後柏原 (一〇三代)</p>	<p>二二六一 (一五〇三)</p>	<p>四六四</p>	<p>文龜三年甲子正月 八条地区 平惟茂の兵攻千新方城を攻む 菩提院開の後遷居する。</p>	<p>(二六年後) 四八七年丁</p>
<p>後柏原 (一〇四代)</p>	<p>二二六四</p>	<p>四六一</p>	<p>清淨院第十一代 文善上人多暎として新方願希(新方願基五 代) 八条地区平定、八条地区に一寺を建立する。</p>	<p>(三五年後) 四六八年丙</p>
<p>正親町 (一〇六代)</p>	<p>二二二八 (一五六八)</p>	<p>四〇七</p>	<p>永禄十耳末、清淨院傍九代一善山總上人徒弟心蓮社三誓相受 代 仏光山親愛院開山、第一〇七代後陽成天皇、皇紀二二七 七年・三八四年前 天正二年甲戌八月二十二日示寂 函後一 無量院は清淨院直屬の末 川菩提寺とす。</p>	<p>(五四年後) 三六四年丙</p>
<p>後陽成 (一〇七代)</p>	<p>二二四二 (一五七七)</p>	<p>三八四</p>	<p>天正戊之年 清淨院中興文善上人徒弟願孝源志和尚太子山 聖徳寺の山号を文善上人より賜わり開山す。第一〇八代後永 尾天皇、皇紀二二七二年三五三年前應云二年百の耳隠化院後 清淨院直屬の川菩提とす。</p>	<p>(二三年後) 三九五年丙</p>
<p>公 前</p>	<p>二二五〇</p>	<p>三七五</p>	<p>天正十八年庚寅秋九月・新方領主 豊臣秀吉の東表征伐に及 ぶ。</p>	<p>(九年後) 三八三年前</p>

天皇系	皇紀	神代前(皇紀)	世系	備考
後陽成 (一〇七代)	二・二四七 (一・五七三)	三六四	天正元西宮 南禅院十代住持上人徒兼正譽經天和尚 臣王 山内親吉三郎山守。八太杉村) 第一の七代後陽成天皇の 二二五二年と三〇三年前遷化。爾後清浄院圓法の小菩提寺 とす。	神皇正統系 三九一年前
後水尾	二・二七二 (一・五九七)	三五三	慶長二年申天 清浄院十一代住持上人徒弟 光裕法正和尚 船渡弘福山龍正寺遷册山する。天正 清浄院圓法の小菩提 とす。皇紀二二七五年三五〇年神代前	三六〇年前
後陽成 (一〇七代)	二・二五二 (一・五九三)	三七三	文祿元上承之宗 清浄院十一代住持上人徒弟實蓮社然譽 善悦和尚。善悦山極意寺の山王正統系前山する。爾後清浄 院圓法の小菩提寺とす。第一一一代後西天皇。皇紀二二二一 年三〇九年神代前 聖文元五三十二月廿日示寂	三八〇年前
後光明 (二〇代)	二・三〇八 (一・六四〇)	三一七	慶安元成子天九月十八日 寺遷二五〇石の地に御朱印十三 石頂戴 新方成主清浄院第十一代住持上人徒飯沼弘經 寺七母名蓮社現存上人代	三二四年前
明治 (二二代)	二・五三三	九二	明治六年神代前改正により一八六四年神代前 明治十五年十一月 不登火により清浄院殿六、明治十二年四月遷任、飯本堂建立 昭和二二宮原地法により十師次第改同廿三年新藤法宗放法 入に登祀、昭和廿八年三月十七日降寸大世神遊社正僧正圓 誓上人如意向良助大和尚遷化、遷化後、皇紀二二五〇年五月八日 上人の遺體建立す。	九九年神代前
昭和 (現代)				